

2027

化粧のできる洗面台

Washstand for Makeup

AD34 中山 達也
指導教員 小西 均

1. 研究目的

60年代以降、化粧台が減少傾向にあり、変わりに洗面化粧台が定番になっている。しかし、私は洗面台で化粧をしている人を見たことが無かった。そこで、今まで削られてきた化粧の行為を考察することで現代の生活様式に合った化粧洗面台ができると考え、化粧のできる洗面台を研究することにした。

2. 調査と分析

1. ユーザーへのアンケート調査

・化粧をする場所は、主にリビングの机・化粧の時間は20分程度。そして、主にリビングのテーブルで座りながら化粧品を机に並べて化粧することがわかった。しかし、洗面台がある場所は、リビングに有るのではなく、サニタリーと言われるトイレやお風呂などの衛生面を整える別の空間に存在している。これが洗面台で化粧をしない一つの理由だと考えられる。もう一つの理由は、化粧洗面台をカテゴリーで分けると、収納キャビネットになり、化粧台は机になると考えた。アンケートでも言われていたように、化粧は机であるという意見から、洗面台に机の要素を引き出すことで、化粧のできる洗面台になると考えた。そのためには、机が机である要素を研究し、洗面台に応用する必要がある。

2. 家庭の洗面台製品調査

・幅が750mm。そして、床から洗面ボウルまでの高さが750mmが一般的であった。

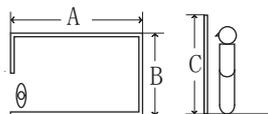
3. コンセプトの立案

・洗面行為とゆったりとした化粧を可能にする。
・椅子が使用でき、化粧品の収納部及び化粧のできる作業スペースを確保する。

4. デザイン展開

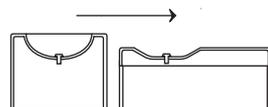
1. 空間の設定

サニタリーの平均的なサイズから、 $A \cdot 2200\text{mm} B \cdot 1000\text{mm} C \cdot 2000\text{mm}$ とした。



2. 机の要素を引き出す実験

洗面台の高さの検証をし、従来の洗面台から150mm



低くした。これはオフィス机の平均と、ほぼ同じである。

3. 作業スペースの確保

視覚的に広く感じさせる為に、洗面ボウルをなるべく



平にする必要があると考え、ボウルを徐々に平らにし水を流す実験から、70mmの深さが適していることがわかった。また、机の要素を引き立たせる為に四本の足とした。しかし、机の要素を引き出し過ぎたため、堅苦しいイメージになってしまった。そこで、一本の柱を軸にして構成されているデザインへと変更した。その柱に収納棚を取り付けるにあたって、立った状態から棚に置かれた物が見えない高さに設置した。

5. 完成図



6. 結論

検証の結果、「化粧をしている時に手が洗えて良い」「お風呂上がりに髪を乾かす時も座れて良い」「マニキュアとかも塗れる」等の意見があった。マニキュアを塗って雑誌を読んだりする行為が生まれることで、リビングの机の要素を引き出すことに成功したと思える。

7. 参考文献

「暮らしを変えた生活部品」

<http://www.cbl.or.jp/gijutu/05/01.html>